

「統計を使わないと研究じゃない？-質的データあれこれ-」

ご存じの方はご存じと思いますが、心理学は行動と心的過程についての「科学的」学問ということになっています。そうした関係で、心理学論文は実験や測定をもとに統計を扱ったものが主流であり、本学会は心理学のみを対象とする訳ではありませんが、その影響を大きく受けているように思います。

ただし心理学といっても実験や測定に基づく量的データに限られるものではなく、観察法を用いたり文献研究を行ったりする場合もあります。相談事例の研究は、この分類でいくと観察法の中の「参加観察」ということになるかと思いますが、カウンセラー（教員）とクライアント（児童・生徒）の発言内容をもって分析を行っていきま。即ち、一般的には統計を用いることをしません（もちろん例外はあります。※脚注1参照）。

他にも「新しい研修や授業内容を実施してみて、受講者にこれまでの研修や授業との比較を感想として聞いた」というような研究もあり得るでしょう。「全く理解できない（1）～とても良く理解できる（10）までの10段階評価」などのように数値化して量的データに変換できない訳ではありませんが、細かく「どこがどう違って、どの点は良くなって、どの点は悪くなっているのか」と個別にインタビューしていくと、そこには数値化できない質的データが生じることになります。そしてそれは、数値化できないからといって決して「意味のないもの」ではありません。

量的データと質的データは「目的が異なる」と言ってもいいのかもしれませんが。例えば不登校の児童・生徒がどのくらいいるか、不登校の理由はこういった理由に偏っているかは量的データとして表示可能ですが、「なぜその児童・生徒は不登校なのか」「どうすれば登校できるか」は質的データから見ていく必要があります。量的データを補うものとして、質的データは必要なのです。

ただ質的データは「主観が入りやすい」「数が取りにくい」という課題があります。それを如何にできるだけ「客観的に」「一般化して」表現できるかということに注意を払っていく必要があります。

※注1 近年、事例検討でも（修正版）グラウンデッドセオリーを用いて発言をコーディングして分析するなど、質的データを「見える化」して分析する手法が進んでいます。「統計が分からないから質的研究をする」のではなく、実践家といえども、新しい研究手法に注意を払う必要があると考えています。

※注2 最近では1事例のみの事例研究は学会誌査読を通りにくくなっていて、2事例と言わずそれ以上の複数事例が求められることが多くなっています。質的研究では事例を劇的に増やすことは困難ですが、客観性や一般化を求めるために、事例の数が求められることはこれからも続いていくものと思われま。

（秋田県立大学 渡部昌平）